大菩薩峠

（十八）

農奴の巻

中里介山

時代小説文庫

時代小説文庫 18

大菩薩峠（十八） 農奴の巻 全二十冊

昭和五十七年八月二十日 初版発行

著者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五（代表）

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 暁印刷 製本所 大谷製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600118-7440(0)

時代小説文庫　18

富士見書房

大菩薩峠（十八）

農奴の巻

中里介山

目次

恐山の巻（つづき）　七
農奴の巻　一三元
峠の剣法　志茂田景樹　四元

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

大菩薩峠

(十八)

農奴の巻

恐山の巻（つづき）

四十七

その時分、青梅の裏宿の七兵衛は、例の怪足力で出羽奥州の広っ原のまん中を、真一文字に歩いていたのです。

旅に慣れきった七兵衛も、これは広い荒野原だと、呆れずにはいられません。

同時に、これも、やむを得ない、自分は今、名にし負う奥州の安達ケ原の真ん中を歩かせられているのだ。

安達ケ原だから、広いのもやむを得ない。しかし、こうして覚えのある足に馬力をかけてさえいれば、たとえ安達ケ原であろうと、唐天竺であろうと、怯れを見せるがものはない。ただ、今まで自分の経験においてはじめて見る荒涼たる広っ原だと、多少の呆れをなしたもので、退倒を来たしたわけではないのです。

安達ケ原だから広い。その広い安達ケ原を歩かせられていると観念して見れば、今更広いことに呆れるというのも智慧のない話だとあきらめて、せっせと足に任せて歩いているが、太陽がよ

うやく自分の背の方に廻ったことに気がつくと、さあ、今晩の宿だ。東海東山の旅路では、どう紛れこんでも、何かある。山神村祠か山小屋、瓜小屋の類を、何処かの隅で見つけないことはないのだが、奥州安達ヶ原と来ると、ないと言えば、石っころ一つない——土を掘って、穴を作って寝るか、木の上へ枝をかき集めて、巣を作って眠るか。

一たい、この安達ヶ原という奴は、何処で尽きるのだ。

七兵衛は歩きながら、こういう疑問を我と自問自答してみましたが、七兵衛の地理学上の素養が、この際、それと明答を与えてくれませんでした。

それそれ、奥州の涯は外ヶ浜というところだと聞いている。してみると、この安達ヶ原を通り抜けると、外ヶ浜へ出る——外ヶ浜はいいが、浜となってみると、それからは海で、そこで陸地が尽きるのだ。安達ヶ原を乗り切るのはいいが、乗りきって海へ出てしまったんではなんにもなるまいではないか。そのくらいなら、ドコかで方向転換をしなければならぬ。

方向転換の手段方法として、方位方角の観念だけは、七兵衛の経験と、感覚が、その用を為すに充分である。どう間違っても、天に日があり、地に草木がある限り、東西南北の観念をあやまるような七兵衛ではないが、しかし、東西南北がたよりになるのは、そのうちのどれか一方に目的がある場合に限るので、東西南北いずれの方へ出たら近路につけるかという観念のないときには、東西南北そのものが指針とはならないのです。

長州の奇傑、高杉晋作は「本日東西南北に向かって発向仕り候」と手紙に書いたようだが、最初からそういう無目的を目的として発向するなら是非もないが、少なくとも、今の場合の七兵

衛は、いかに生来の怪足力とはいえ、歩くことのために歩いているのではない。どうかして無事に人里に出たいものだ、正しい方向に向かって帰着を得たいものだ――と衷心に深く欣求して、ひたぶるに歩いているのです。

東西南北のいずれを問わず、ともかく何か引っかかりのある地点へ出てみたいものだと歩いているのです。ところが、やっぱり原は呆れ返るほど広い。

「安達ヶ原は広いなァ――」

と七兵衛が今更の如くにまた呆れた時分に、日は野末に落ちかかりました。

百四十八

常の七兵衛ならば、足において自信があるように、旅においても、その用意のほどに抜かりはありませんでした。

たとえば、この行程幾日、もし間違って横へ走っても何日――その間の地理学上、よし絶食しても幾日の間、そういうことの予算をちゃんと胸に畳んで走りもし、逃げもし、変通もしていたのですが、今回は、何しろはじめての奥州路、その用意をするにも、しないにも、その機会と、材料とを絶対に与えられない縄抜けの身となって、着のみ着のままで、仙台領を脱走して来たのです。

燧道具と、付け木だけは辛うじて船頭小屋からかっぱらって来たが、それ以外には何物もない。常ならば懐中に少なくとも七つ道具を忍ばせている。その七つ道具は多年の経験によって洗練

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

研究しつくされている独特の七つ道具で、それが商売物にもなれば、旅行用にもなる。

よし、また、そんなものがなくとも、人間の部落を成す土地をさえ見つけ出せば、七兵衛の本職として、そこから無断で、自由に、相当のものを徴発して来るのは、袋の中のものを取り出すと同様の能力を与えられている身だが、他のものを盗まねば生きられぬという浅ましい本能よりも、盗むべき何物もない荒涼さのほうがたまらない。

ついに日が暮れました。

足の七兵衛は、疲れるということを知らないが、腹の七兵衛は、餓えるということを知っている。

ああ、今夜もまた夜通し歩かねばならないのか。

歩くのは何でもないが、腹がすいている。それも時によっては、二日や三日食わないで歩けといわれれば歩けないこともないが、そうして至れり尽くすところが外ヶ浜ではやりきれない。つまり、行く手に希望がありさえすれば、疲労も、飢餓も、頑張るだけ頑張って行く張合いというものがあるが、さて、頑張り通した揚句が、外ヶ浜では大がいうんざりする。

さすがの七兵衛も、これにはうんざりしながら、そうかといって足をとどめようとする何らの引っかかりもなく、行くにつれて宵は深くなる。星は相当あるべき晩なのですが、降るというほどではないが、天が曇っている。

真暗な晩です。

しかしまた、真暗ということは、決して常人ほどに七兵衛を難渋させる事情とはならない。彼

は弁信のような、神秘的な勘は持っていないが、多年の商売柄と、それから幾分の天才とで、暗中よく相当に物を見るの明を保有している。そこで暗いということは苦にせずして、怪足力に馬力を加えていっているうちに、幸か不幸か、遥かに彼方にたしかに一点の火を認めました。

火のあるところに人があり、文明がある、という哲理は、前に、田山白雲の場合にも書きました。

七兵衛は、その敏感な眼を以て、数町か、数里か、とにかく、行く手のある地点で一つの火光を認めてしまったものですから、七兵衛ほどの曲者も、

「しめた！」

と叫んで、その怪足力がまたはずみ出したのはやむを得ません。

七兵衛の眼は、あやまたず、たしかに、一点の火光があり、その火光を洩らすところの一つ家がある！

だが、およそ外と違って、安達ヶ原の一軒家――見つけたことが幸か不幸かわかるまい。

百四十九

「そうだ、安達ヶ原の黒塚には鬼がいる！」

七兵衛ほどの代物だが、それと感づいた時に一時は、たじろぎました。

安達ヶ原といえば、誰だって「一つ家」を思い出さないものはあるまいが、「一つ家」を思い出す限り、その「一つ家」の中に棲んでいるものが「鬼」でなくて何だ。

鬼は有難くないな。

とうとう、安達ヶ原へ迷いこんで、鬼の籠る一つ家へ追い込まれてしまった。

有難くねえな。

七兵衛は苦笑いをしてしまいました。いかに科学の力に乏しい七兵衛とはいいながら、いかにまた土地柄が奥州安達ヶ原とはいいながら、田村麿の昔ならいざ知らず、今の世に「鬼」なんぞが棲んでたまるか——と冷笑するくらいの聰明さを持たない七兵衛ではないが、こういう時間、こういう場合に置かれてみると、どうしても、その聰明さが取り戻せない。馬鹿馬鹿しいと思いながら、やっぱり、あちらに見えるあの一つ家は鬼の隠れ家だ、そうでなければこんなところに、こんなに一軒家の生活が成り立つわけのものではない。

七兵衛は、鬼の存在を、事実において否定しながら、想像において、どうしても絶滅を期することが出来ない。

しかし、この際においては、鬼であろうとも、夜叉であろうとも、取って食われようとも、食われまいとも、あの一つ家を叩いてみるより外はない。まして自分として、鬼とも組もうというほどの力持ちではないが、何もそう鬼だからといって、弱味ばかりを見せていていい柄ではない。おれも武州青梅の裏宿七兵衛だ。安達の鬼が出て、食おうとも言わない先から逃げては名折れになる。

ここで、はじめて、七兵衛は、鬼に対する一種の敵愾心と、満々たる稚気とを振い起して、その一つ家に向かって近づいてみると、程なく——右の一つ家のつい眼の前のところへ来て、小流

れに出くわしました。

人間の棲むところの家には火がなければならぬと同一の理由をもって、水がなければならない。鬼といえども、口があって、腹がある動物である以上は、水のないところに棲息は出来ないはずだ。

こうなければならないと、七兵衛はその小流れを肯定しつつ軽く飛び越えてみると、この小流れから一つ家に到るまでの間が、まだ相当の空地になっている。その空地に塚を置いたように、相当の間隔を置いて、幾つもの土饅頭がある。その土饅頭に一本二本ずつの卒塔婆がおっ立っている。

それはまあいいとして、その土饅頭を数えてゆくと、今掘りっ放しの穴がある。穴の傍らに、極めて粗造な棺箱が荒縄でからげられて、無雑作に押しころがされてある。

その荒涼さには、七兵衛ほどのくせ者も、ぎょっとせざるを得なかった。その粗造な棺箱の板の隙間を、七兵衛が鋭い眼を以て透し眺めると、中にはまさしく人骨と、人肉が、バラバラになって詰め込まれて、透間からまでハミ出してさえいる。

「鬼に喰われた人間の食い残されだ！」

遮二無二そう思わせられると、ここでも七兵衛ほどの曲者が、思わず身の毛をよ立てざるを得ません。

これが、音にきく、安達の黒塚で、この棺箱の中がすなわち鬼に喰いちらかされた人骨だ――事実、今時、そんなことが有り得るはずはないが、想像としては、どうしてもそれより以外へ出ることは出来ない。

当然、自分は、その安達の黒塚の鬼の棲処へ送りつけられて来たものだ。もう退引がならない。

だが、鬼は鬼としても、こうして食い散らかした人間の骨を、御粗末ながら棺箱の中へ納めておくというところに幾分の殊勝さがある。まして、こうして幾つもの土饅頭、いずれ鬼どもが思うさま貪り食った残骨の名残でもあろうが、それにしても、形ばかりでも埋めて、土を盛り上げた上に、卒塔婆の一本も立てようというのが、鬼としては、いささか仏心あるやり方だ。今時の鬼は、なかなか開けてきている。七兵衛は、こんなような冷笑気分も交って、やがて思いきって、一つ家の前へ進んで、その戸を叩いてみると、中からかえって怯えたような声で、

「おや、誰だえなア、今頃、戸を叩くのは」

「ちょっとお頼み申します」

「誰だえなア」

「ええ、旅のものなんでございますが、道に迷いましてからに」

「旅の衆かエ――まあ、どちらからござらしたのし」

「ええ、西の方から参りました」

「西の方から、では、小平の方からいらしたな」
小平が西だか東だか知らないけれども、七兵衛は、この際、余計なダメを押す必要はないと考えて、
「はい、さようでございます」
「ほんとかなあ、よく、まあ、この夜中に、鬼にも喰われねえで……」
「え……」
と、七兵衛がまた聞き耳を立てました。先方の今言った言葉の意味は、よくまあこの夜中に鬼にも喰われないで、無事にやって来たな——とこういう意味に相違ないから、七兵衛が先を打たれてしまったように感じました。鬼に喰われずにここまで来たんではない。これから鬼に対面して、喰われるか、喰うかの土壇場のつもりで来ているのだ。
七兵衛の狼狽に頓著なく、先方は早や無雑作に土間へ下りて来て、七兵衛の叩いた戸を内から開けにかかりながら言うことには、
「よく、まあ、鬼にも喰われずにござらしたのし、お前さん、岩見重太郎かのし」
「いや、どうもお蔭様で——」
岩見重太郎呼ばわりまでされたので、七兵衛も内心いよいよ転倒恐縮せしめられていると、無雑作にガラッと戸を開けて、面を現わした主は、鬼どころではなく、人間も人間、人間の中の極めて温良質朴な男です。
「今晩は……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto